

<原 著>

自尊感情とフィードバックされた性格特性語の得点が 想起の正確さに及ぼす影響

佐藤秀樹¹ 田中知恵² 兼子唯^{1, 3} 巢山晴菜^{1, 3} 伊藤理紗¹ 鈴木伸一⁴

要 約

本研究の目的は、低自尊感情者は高自尊感情者よりもフィードバックされた性格特性語の得点を正確に想起するという差異正確性モデルと、フィードバックされた性格特性語の得点は自尊感情に一致する方向に歪めて想起されるという感情価一致モデルの仮説を立て、自尊感情とフィードバックされた性格特性語の得点が想起の正確さに及ぼす影響を検討することであった。大学生 24 名を対象に、自尊感情に関する質問紙調査とフィードバックされた自己評価を偶発的に想起させる実験を実施した。本研究の結果から、自尊感情に関わらず、想起の正確さに違いは見られなかった。本研究の結果をふまえて、想起の正確さに及ぼす他の要因と臨床研究への還元可能性の観点から考察した。

キーワード：自尊感情, フィードバック, 性格特性語, 差異正確性モデル, 感情価一致モデル

問 題

我々が形成する自己評価は必ずしも正確ではなく、自己に関する記憶バイアスがあるとされる(藤島, 2010)。自己に関する記憶バイアスが生じる要因として、自尊感情が挙げられる。自尊感情とは「自己の価値に対する評価的感情あるいは自己に対する態度」と定義される(渡辺, 1995)。自尊感情は記憶などの様々な認知過程と関連があり、自己評価の形成において自尊感情が想起の正確さに影響を及ぼすことから(Crocker & Park, 2004)、自尊感情が自己に関する想起の正確さに及ぼす影響について検討する必要がある。

自尊感情が想起の正確さに影響を及ぼすことを説明したモデルとして、差異正確性モデルと

感情価一致モデルがある(Story, 1998)。差異正確性モデルによると、低自尊感情者は高自尊感情者よりもフィードバックされた性格特性語の得点を正確に想起するとされる。差異正確性モデルは、非抑うつ者の記憶はポジティブな方向に歪んで想起され(仲由・古川, 2004)、抑うつ者の記憶は、非抑うつ者よりも、自分自身や環境を正確に想起するという抑うつリアリズムに依拠している(Alloy & Abramson, 1979)。また、こうした記憶の歪みは、抑うつだけでなく自尊感情でも生じることが明らかにされている(Tennen & Herzberger, 1987)。これらのことから、差異正確性モデルで示される現象は、自尊感情でも抑うつと同様の知見が得られると考えられる。

一方、感情価一致モデルによると、自尊感情に一致する性格特性語の得点は正確に想起され、自尊感情に一致しない性格特性語の得点は自尊感情に一致するように想起が歪められるとされる。感情価一致モデルは、人間は自己を確

¹早稲田大学人間科学研究科, ²明治学院大学,
³日本学術振興会特別研究員, ⁴早稲田大学人間科学学術院

証するような情報に選択的に注意を向ける傾向があるので、自己確証的に情報を符号化あるいは検索し、情報を自己確証的に解釈するという自己確証理論に依拠している (Swann, Rentfrow, & Guinn, 2003)。この理論をふまえると、自尊感情と一致するフィードバックの内容は、一致しない内容よりも想起が正確であると考えられる。このように、差異正確性モデルと感情価一致モデルはそれぞれ実証的に支持されているにも関わらず、互いに相反するモデルである。Story (1998) は、自己に関連する記憶は、自尊感情とフィードバックの好ましさの影響を受けるかの検討をした。この研究では、実験参加者が性格特性語に関する課題遂行後にその結果をフィードバックし、その後偶発的にフィードバックされた内容を想起するよう求めたところ、感情価一致モデルを支持した。しかしながら、日常生活の中で他者からフィードバックを受ける場面は、フィードバックは課題を行った直後より一定期間空いてからされるほうが多く、その間に想起の歪みが生じる可能性がある。

そこで本研究では、自尊感情とフィードバックされた性格特性語の得点が想起の正確さに及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために、低自尊感情者は高自尊感情者よりもフィードバックされた性格特性語の得点を正確に想起するという差異正確性モデルを支持する仮説と、自尊感情に一致する性格特性語の得点は一致していない性格特性語の得点より正確に想起され、そして自尊感情に一致していない性格特性語の得点は自尊感情に一致する方向に歪めて想起されるという感情価一致モデルを支持する仮説を立てた。そして、課題遂行後に一定期間空いてからフィードバックを受けた場合の想起の正確さを検討することで、評定時とフィードバック時の間で生じる想起バイアスを検討することを第1の目的とした。また、自己に関連する想起の正確さは、自

尊感情といった特性的側面に影響を受けるのか、それともフィードバックされる内容に影響を受けるのかを検討することを第2の目的とした。

方 法

(1) 実験者

臨床心理学を専攻する第1筆者が実験を実施した。

(2) 実験協力者

実験は2つのフェーズから構成され、フェーズ1では、都内私立大学の学生31名(男性7名、女性24名)が実験に参加した。実験協力者の平均年齢は20.97歳 ($SD=0.77$)であった。フェーズ2では、都内私立大学の学生24名(男性4名、女性20名)が実験に参加した。実験協力者の平均年齢は21.21歳 ($SD=0.76$)であった。

(3) 実験時期

2012年7月に実験を実施した。

(4) 調査材料

①自尊感情に関する尺度

自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982): 10項目からなり、得点が高いほど自尊感情が高いことを表す。参加者には「1:あてはまらない」から「5:あてはまる」の5件法で回答を求めた。この尺度は、桜井(2000)によって信頼性と妥当性が確かめられている。

②性格特性に関する尺度

パーソナリティテスト: Big Five 尺度(和田, 1996)を用いた予備調査の結果から構成されたテストである。20項目(ポジティブ語10項目、ネガティブ語10項目)からなり、参加者には「0:全くあてはまらない」から「100:非常によくあてはまる」の値で回答を求めた。

(5) 手続き

フェーズ1において、研究の趣旨説明を行うことのできた学生に対し、研究の目的や意義等の説明を行い、研究参加に同意する場合に

は、質問紙に回答、提出するように求めた。

フェーズ2では、フェーズ1の実験に参加した実験協力者に対し、パーソナリティテストの得点をフィードバックするという趣旨で実験参加を求めた。実験実施場所は心理学実験室で、参加者は1名から6名で実施された。自尊感情群ごとに性格特性語ごとの自己評価得点の平均値を算出し、好ましい方向に約15点操作した性格特性語10項目（ポジティブ語5項目、ネガティブ語5項目）と、好ましくない方向に約15点操作した性格特性語10項目（同上）を実験協力者にフィードバックした（Table1）。実験者の指示により、実験協力者は封筒から性格特性語の得点が記された用紙を取り出してその内容を確認した後に、再びその用紙を封筒に入れて実験者に返却した。

次に、実験協力者にフィードバックされた性格特性語の得点を想起して評定を行うために、実験協力者は封筒を渡され、その封筒の中から「先ほどのフィードバックの内容をできるだけ正確に思い出してください」と教示文が書かれている回答用紙を取りだし、その質問に対して「0：全くあてはまらない」から「100：非常によくあてはまる」の値で回答を求めた。実験協力者は回答が終了した後、回答用紙を再度封筒に入れ、実験者に提出した。そして、実験者から実験中に何か疑問に感じた点はなかったかを質問された後にディブリーフィングを受け、実験を終了した。

（5）分析方法

フェーズ1のみ実験に参加した者は分析対象から除外した。また、欠損値の個数が項目数の10%を超える尺度が1つでも認められた回答は分析対象から除外した。

フェーズ1の結果から、自尊感情尺度で平均値以上の参加者は自尊感情高群、平均値以下の参加者は自尊感情低群とした。次に、自尊感情群ごとに性格特性語ごとの自己評価得点の平均値を算出し、好ましい方向に約15点操作する性

格特性語10項目（ポジティブ語5項目、ネガティブ語5項目）と、好ましくない方向に約15点操作する性格特性語10項目（同上）を決定した（Table1）。

想起の正確さ得点の算出方法として、実験参加者にフィードバックされた性格特性語の得点と実験参加者がフェーズ2で想起した性格特性語の得点との差の絶対値とした。第1に、フィードバックされた想起の正確さ得点が好ましい項目と好ましくない項目で想起の正確さに違いが見られないことを確認するために、フィードバックされた性格特性語の得点（好ましい、好ましくない）を独立変数、想起の正確さ得点を従属変数とした対応のあるt検定を行った。第2に、想起の正確さは差異正確性モデルと感情価一致モデルのどちらに一致するかを検討するために、自尊感情（高群、低群）およびフィードバックされた性格特性語の得点（好ましい、好ましくない）を独立変数、想起の正確さ得点を従属変数とした混合計画の2要因分散分析を行った。

本研究の仮説は、以下の通りである。

- ①フィードバックされた性格特性語の得点が好ましい項目と好ましくない項目とで想起の正確さ得点に違いは見られない。
- ②自尊感情低群は自尊感情高群よりも想起の正確さ得点は小さい。
- ③自尊感情高群はフィードバックされた性格特性語の得点が好ましい項目のほうが好ましくない項目よりも想起の正確さ得点が小さく、自尊感情低群はフィードバックされた性格特性語の得点が好ましくない項目のほうが好ましい項目よりも想起の正確さ得点は小さい。

結果

（1）記述統計量

全ての性格特性語の想起の正確さ得点につい

Table1 記述統計量

性格特性語	フィードバックされた性格特性語の得点	M	SD
悩みがち	好ましい	11.50	9.79
計画性のある	好ましい	8.00	6.26
いい加減な	好ましい	7.96	8.65
臨機応変な	好ましい	12.38	9.73
積極的な	好ましい	16.54	12.46
良心的な	好ましい	12.79	12.03
自己中心的な	好ましい	13.21	9.84
緊張しやすい	好ましい	10.71	10.01
向上心のある	好ましい	9.88	9.49
気が利かない	好ましい	6.54	10.91
興味の広い	好ましくない	6.83	8.77
悲観的な	好ましくない	12.04	9.47
とげがある	好ましくない	10.25	12.05
社交的	好ましくない	7.96	8.89
神経質な	好ましくない	12.21	9.65
独立した	好ましくない	12.04	10.11
動揺しやすい	好ましくない	13.08	13.45
飽きっぽい	好ましくない	16.83	17.23
呑み込みの早い	好ましくない	14.54	11.22
寛大な	好ましくない	12.96	10.64

て平均値および標準偏差を算出した (Table1)。

(2) 性格特性語による想起の正確さの等価性の検討

本研究の分析方法をふまえて、実験協力者 24 名を対象に分析を行った。まず、フィードバックされた性格特性語の得点 (好ましい, 好ましくない) を独立変数, 想起の正確さ得点を従属変数とした対応のある t 検定を行った。その結果, 好ましい項目と好ましくない項目とで想起の正確さ得点に違いが見られなかった ($t(23) = .74, n.s.$)。このことから, フィードバックされた性格特性語の得点によって想起の正確さに

違いは見られないことが確認された。

(3) 自尊感情とフィードバックされた性格特性語が想起の正確さ得点に及ぼす影響の検討

自尊感情 (高群, 低群) とフィードバックされた性格特性語の得点 (好ましい, 好ましくない) を独立変数, 想起の正確さ得点を従属変数とした混合計画の 2 要因分散分析を行った。自尊感情 (高群, 低群) とフィードバックされた性格特性語の得点 (好ましい, 好ましくない) ごとの想起の正確さ得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。

その結果, 交互作用, フィードバックされた性格特性語の得点の主効果, 自尊感情の主効果全てに有意差は見られなかった (順に, $F(1, 22) = 1.43, n.s.$; $F(1, 22) = .55, n.s.$; $F(1, 22) = 2.44, n.s.$)。

考 察

本研究の目的は, 低自尊感情者は高自尊感情者よりもフィードバックされた性格特性語の得点を正確に想起するという差異正確性モデルと, フィードバックされた性格特性語の得点は自尊感情に一致する方向に歪めて想起されるという感情価一致モデルの仮説を立て, そのどちらに当てはまるのかを検討することであった。

本研究の結果から, 自尊感情とフィードバックされた性格特性語の得点によって性格特性語の想起の正確さに違いは見られなかったことから, 差異正確性モデルと感情価一致モデルのど

Table2 自尊感情とフィードバックされた性格特性語の得点が想起の正確さ得点に及ぼす影響

フィードバックの方向	自尊感情		交互作用 F-value	主効果(条件) F-value	主効果(群) F-value
	低 (N = 11)	高 (N = 13)			
好ましい	12.14 (2.80)	9.55 (3.11)	1.14 <i>n.s.</i>	.55 <i>n.s.</i>	2.44 <i>n.s.</i>
好ましくない	12.75 (5.03)	10.85 (5.92)			

註) カッコ内の数字は標準偏差を示す。

ちらが優れたモデルであるかを証明することはできなかった。

本研究で差異正確性モデルと感情価一致モデルの両方の仮説が棄却された理由として、第1に、自尊感情の変動性が考えられる(阿部・今野, 2007)。自尊感情の変動性とは、「短期的な自尊感情の変動のしやすさ」と定義される

(Kernis, Grannemann & Barclay, 1989)。たとえば Kernis, Grannemann & Mathis (1991)は、自尊感情の高さと変動性が抑うつに及ぼす影響を検討し、自尊感情が高く安定しているものと低く安定している者との間には抑うつ得点に有意な差があったが、自尊感情が高く不安定なものとは低く不安定なものとの間には有意な差が見られなかった。このことから、自尊感情をその高さと変動性の2側面から検討することで、自尊感情の高さには適応的側面と不適応的側面があると考えられる。

本研究ではフィードバックされた内容の記憶は自尊感情の影響を受けるという仮説を立てていたことから、自尊感情はフィードバック等に関連しない特性的感情と位置づけていた。しかしながら、Leary, Tambor, Terdal & Downs (1995)は、自尊感情は学業成績のフィードバックや社会的受容と排斥によって変動することから、自尊感情は状況依存的感情と位置づけている。このことから、今後は自尊感情をその高さと変動性という2つの要素に分解したうえで想起の正確さとの関連を検討する必要があると考えられる。

第2に、本研究で用いた記銘項目は性格特性語であったが、自尊感情に関わらず、記銘項目が実験参加者に関連があるものを正確に想起するという自己関連づけの要因が関連していた可能性がある。一般的に、記憶に関する研究で単語を記銘項目とした場合、形態処理や音韻処理よりも意味処理を求めた方が単語の偶発記憶成績が優れている。さらに意味処理の中でも、自己と関連づける処理を行うことで記憶成績が促

進され、このことは自己関連づけ効果とよばれる(堀内, 2008)。Rogers, Kuiper & Kirker (1977)は記銘項目が自己の性格や特徴にあてはまるかを判断する自己記述課題を用いた。この研究では、性格特性語を用いて、形態処理条件、音韻処理条件、意味処理条件、自己関連づけ処理条件を設け、それぞれの処理での再生成績を検討した。その結果、自己関連づけ条件が偶発再生成績で最も優れていたことから、記銘項目が自己に関連しているかが想起の正確さに影響を与えると考えられる。

本研究でも性格特性語を記銘項目として用いたが、実験の手続きとして、まず実験参加者に各性格特性語がどれだけ自分に当てはまるかを数値で評定してもらい、次に群ごとに性格特性語の評定値の平均値を算出したうえで性格特性語の得点を好ましい項目と好ましくない項目に分けた。そのため、各実験参加者がフィードバックされた性格特性語の得点を記銘し想起するときに自己関連づけの処理がなされていたかを判断するのはできない。このことから、今後はフィードバックされる性格特性語の得点を群ごとに統制するのではなく、各参加者で操作した場合にも本研究と同じような結果になるのかを検討する必要があると考えられる。

以上のことから、自尊感情が記憶の正確さに影響を示さなかった要因の1つとして、自尊感情の変動性が挙げられる。そのため、満足のいく出来事を確認し、ネガティブな出来事の原因帰属の仕方を自己に向けすぎないようにする等の自尊感情を高める臨床的介入をすることで、他者からポジティブな評価をされた時の想起が正確となり、ポジティブな自己評価につながると思われる。このことから、今後は、想起の正確さに影響を与える可能性のある自尊感情の変動性に焦点を当てた介入の効果や、臨床技法の開発研究に関する検討が望まれる。

引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, **16**, 36-46.
- Alloy, L. B. & Abramson, L. Y. (1979). Judgment of contingency in depressed and nondepressed student: Sadder but wiser? *Journal of Experimental Psychology: General*, **108**, 441-485.
- Crocker, J. & Park, L. E. (2004). The costly pursuit of self-esteem. *Psychological Bulletin*, **130**, 392-414.
- 藤原喜嗣 (2010). 自尊感情と自己関連情報に基づく推論の歪み 村田光二 (編) 現代の認知心理学<6>社会と感情 (第4章 pp.74-97) 北大路書房
- 堀内 孝 (2008). エピソード記憶と自己—自己関連付けをめぐる問題— 心理学評論, **51**, 43-58.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of personality and social psychology*, **56**, 1013-1023.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Mathis, L. C. (1991). Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 80-84.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of personality and social psychology*, **68**, 518-530.
- 仲由千春・古川真人 (2004). 抑うつ傾向が将来の予測の正確さに及ぼす影響 学苑, **761**, 98-105.
- Rogers, T. B., Kuiper, N. A., & Kirker, W. S. (1977). Self-reference and the encoding of personal information. *Journal of personality and social psychology*, **35**, 677-688.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, **12**, 65-71.
- Story, A. L., (1998). Self-esteem and memory for favorable and unfavorable personality feedback. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 51-64.
- Swann, W. B. Jr, Rentfrow, P. J., & Guinn, J. S. (2003). Self-verification: The search for coherence. In M. R. Leary & J. P. Tangrey (Eds.), *Handbook of self and identity*, New York: Guilford Press. pp.367-383.
- Tennen, H., & Herzberger, S. (1987). Depression, self-esteem, and the absence of self-protective attributional biases. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 72-80.
- 和田さゆり (1996). 人格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
- 渡辺 聡 (1995). 日本語版集団自尊心尺度構成の試み 社会心理学研究, **10**, 104-113.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

The effect of self-esteem and the scores of given personality characteristic words on recall accuracy

Hideki Sato¹ Tomoe Tanaka² Yui Kaneko^{1,3} Haruna Suyama^{1,3}
Risa Ito¹ Shin-ichi Suzuki⁴

¹Graduate school of Human Science, Waseda University ² Meijigakuin University

³Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

⁴Faculty of Human Science, Waseda University

Abstract

The purpose of this study was to investigate whether the differential accuracy model, individuals with low self-esteem would remember the scores given personality characteristic words more accurately than individuals with high self-esteem do or the valence congruency model, accurate recall of the scores given personality characteristic words was expected to be a function of the congruency between the individual's level of self-esteem and the scores given personality characteristic words. Twenty-four undergraduate students completed the questionnaires about self-esteem and were incidentally required to recall their feedback. The results indicated that high and low self-esteem participants recalled as accuracy as personality characteristic words. We discussed these results in terms of other factors related to recall accuracy and their applicability to clinical study.

Key words: self-esteem, feedback, personality characteristic words, the differential accuracy model, the valence congruency model